

ヒンドゥー寺院とカーストの近代

— インド・ケーララ州における地域社会の再編成をめぐる民族誌的研究 (3) —

小林 勝

Hindu Temples and the Modernity of Castes: Ethnographical Research on the Reorganization of Local Societies in Kerala State, India (3).

Masaru KOBAYASHI

6. カルタによる支配体制の崩壊とチャンマナードゥ女神寺院（承前）

もともとチャンマナードゥ女神寺院を所有・管理することは、頻繁なブラーフマンとの縁組とならんで、カルタが自分たちの地位を一般のナーヤル及び低カーストのそれから卓越化し示威する戦略的な手段の一つであったといつてよい。カルタの歴史の初期から、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを媒介として、8つのタラワードに分かれたカルタがひとつのタラワードたることの象徴であったチャンマナードゥ女神寺院こそが、特にその祭礼を通じて、20世紀に入って以降ほぼ完全に崩壊してしまった「儀礼的に重要な家屋と土地からなる全体論的なユニット」としてのカルタのタラワードを、辛うじて人々の想像上において体现することができるものであった。だからこそ、カルタの人々は、この寺院を、後に触れるような平民的ナーヤルを中心としたコミュニティ利益集団（Nayar Service Society）からの度重なる譲渡要求にもかかわらず、自分たちの一族の手で保有し続けることに一貫して執着し続けているのである。現在でさえ、カルタの人々は、この女神寺院を管理する権利を掌握し、その祭祀に祭主として独占的に関与することによって、自分たちが彼らの親や祖父の世代までこの地域の支配者であったことを、少なくとも儀礼的に顕示することができるのだから。

女神寺院の所有権に執着するカルタの姿勢を、当初から私は権威や名誉を維持するためのものと解釈していた〔小林 1997〕。宗教の本質は、世俗の社会とは別の次元、つまり神や魂の救済といった超越的な領域に関わり、それ故に比較的安定した性質をもつ。宗教はその特徴を担保とすることで、対照的に不安定な要素を抱え込まざるを得ない社会的秩序を強化する役割をしばしば果たす〔田中 1991b〕。インド的な文脈でいうなら、カルタは、宗教性を帯びた権力者である「神聖王」や「供犠祭主」に自らを擬していると解釈し得るし〔ホカート 2012；田中 1991a〕、チャンマナードゥ女神寺院は、王都における王宮と寺社を中心とした曼陀羅のコスモロジーおよび「田舎の王宮」としての地方の王立寺院を模倣したものであると解釈することもできないことはない〔杉本 1991〕。実際に、カルタの本家筋と目されるコーヴィラカム・タラワードの屋号「コーヴィラカム」は王宮を意味する。

しかしながら、ケーララ地方のナーヤル・カーストを中心としたかつての支配体制の下において、その宗教的なものによる政治的なものの正当化というところに直接的に介在していたのが、他ならぬ「タラワード」という概念であることも見逃してはならないというのが、本研究におけるここまでの行論の眼目である。重要なのでくりかえすが、ミリンダ・ムーアが明らかにしているように、「タラワード」は旧来考えられていたような「母系合同家族」という集団を指す概念というよりも、タラワードの成員が「儀礼的に重要な家屋と土地からなる財産のユニット」に対して結びつきをもっており、タラワードの成員間の関係もこの財産の共有を通じて展開するという、謂わば全体論的な世界観の中核を占める場を指す概念と考えるべきなのである。「母系合同家族」としての「タラワード」と関連して、旧来「母系制」と翻訳されてきた「マルマッカーヤム」は、出自の原理というよりも、この財産ユニットに対する帰属要件を規定する機制に過ぎない。この財産ユニットが、儀礼的な意味を含めて、極めて重要であったために、「タラワード」は人々の集団を指すというよりも、家屋やその敷地、あるいは領地などの特定のその場所を指すことの方が多いのである。加えて、タラワードの分裂は、系譜論的な周期によるのではなく、新しいタラワードを創設するに足る財産を獲得した機会において生ずるのであり、いったん分かれたタラワード間にはなんら制度化された特別な関係は認められない、とムーアは断言している [Moor 1985 : 527-528, 529-531, 537 ; 小林 2020 : 53-61]。

加藤典洋の『日本人の自画像』における言い回しに倣うならば、「母系出自集団」ないしは「母系合同家族」というのは「肖像画」であるのに対して、ムーアの見出したタラワードの奥深い意義は「自画像」に近いものであると言えるだろう [加藤 2017]。それは人間が生まれてから死ぬまで（否、死んだ後にさえなお）内包される「生きられた家」であって [小林 2000:2001]、「神聖王」や「供犠祭主」が多分に観念的なものであったのに対して、身体の次元においてその実在が生きられていた宗教的な世界観の中核であったといつてよい。ムーアのタラワード論に私たちの議論が加えた唯一の修正は、既に分裂したタラワードが一つの寺院を共有しこれを一つのタラワードの象徴として、あるいは一つのタラワードそのものとすることによって、その統合を維持することが珍しくないということだけである。

寺院は、神の住まう「家」であり、「タラワード」のもともと持っていた宗教的儀礼的な性格を純化したものと考えられる。つまり、象徴的にもこの寺院は、「家屋と土地からなる儀礼的に重要な全体論的ユニット」としてのタラワードという空間の換喩としてある。あるいは寺院の建物はタラワードの家屋そのものと隠喩的な関係にあるといえる。そのことを傍証するように、現在は家屋として使われていない旧地主の古いタラワードが寺院や祭礼時の御旅所として利用されている事例が珍しくない。タラワードの家屋が基づいている宇宙論はそもそも寺院のそれを家屋に適用したものである。この宇宙論の中核を占めるのが「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」であることも、縷々論じてきたところである [小林 2020 : 61-68]。このようなコスモロジーという文脈においても地域社会の中核を占めるが故に、ヒンドゥー寺院をめぐる社会的葛藤は、カラップラム地域に限った話ではなく、それはまた、ケーララにおける地域社会の近代化という文脈において重要な意味をもつ。かつての「タラワード」の隠喩としてのヒンドゥー寺院であるからこそ、ナーヤルに限らず、あらゆるカーストの利益団体が地域社会における寺院の役割を自覚

し、それを自ら保有しようとしており、そこには激しいまでの競合が生じている。にもかかわらず、人類学的なタラワード論からもタラワードをめぐる近代史からも、この問題は、これまでほとんど注目されてこなかった。

さて、私たちはまだ一つのタラワードとしてのカルタによるカラップラム地域における支配体制が崩壊していく過程について、記述している途中である。もともと8つのタラワードの連合



写真1 チャンマナードウ女神寺院での昼の祭祀風景

体であったカルタであるが、1919年あたりからその各タラワードは分裂しはじめ、やがて均分相続によって核家族化した。現在は総数125世帯にまで分割され、一軒あたりの土地や家屋などの財産は一般のナーヤルと大差のないものとなってしまった〔小林 2020:72〕の表2を参照せよ。つまりその限りでは、カルタのタラワードは完全に崩壊しているように見える。チャンマナードウ女神寺院を共有していなければ、カルタ全体はおろか、8つのタラワードそれぞれにおける家と家の関係さえ維持することは困難だろうと多くのカルタが語る所以である。とは言え、このチャンマナードウ女神寺院を中核としたカルタの紐帯を維持すること自体も、今やけして容易いことではない。そのことを以下では説明しておこう。

「タラワード」の崩壊にともなって「マルマツカターヤム」が、一般のナーヤルにとっては、もはや過去のものとなり、財産相続など実質的な意味をほとんど持たなくなっている。しかし、カルタにとっては、それが特にこのチャンマナードウ女神寺院をカルタのタラワードとして保有し続けていくための決定的な条件であるからこそ、現在でもなお強く意識されており、各家においてカルタの系譜を継ぐ女兒が生まれるか否かは小さからぬ関心事であり続けている。言うまでもなく、カルタを存続させるためのこの要件そのものが極めて不確定なものである。たとえば、コーヴィラカム・タラワードの本家として「コーヴィラカム」の屋号を自称するある家（——この主張には他の家から疑義が出ているが…）は、「エットウケットゥ」様式のプットウツパランパットゥの家屋よりも規模は小さいが〔小林 2020:72〕、それでも伝統的なタラワード様式たる「ナールケットゥ」の美しい家屋を維持している。しかし、この家には4人続けて男子が生まれ、ついに女兒を得ることができなかったために、この家でカルタの血を引く最後の女性となった女主人（図1のa）は、一時ノイローゼになってしまったという。彼女の息子4人はカルタのメンバーであるが、孫たちはカルタの成員権を得られないからである。

図1 コーヴィラカム／コーヴィラカム

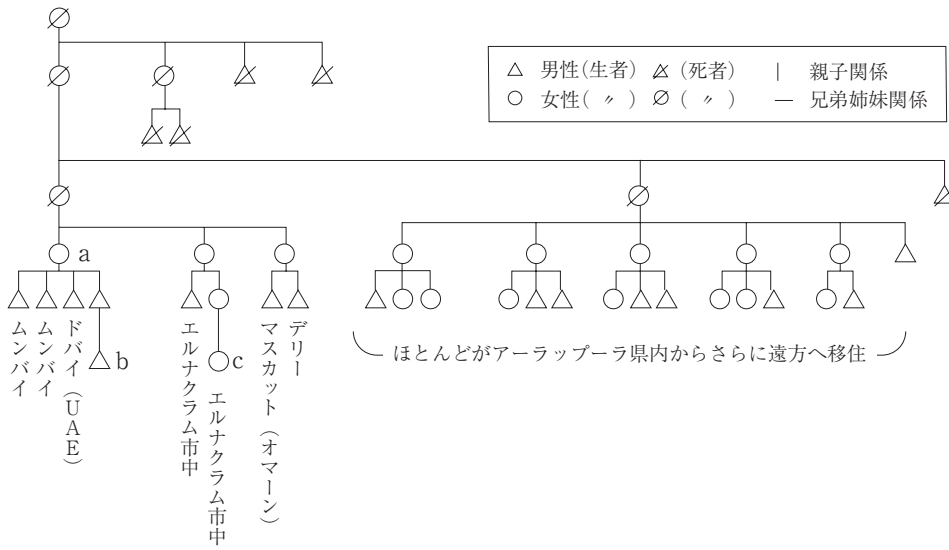


図2 ムントゥバランプ／コーヴィラカム

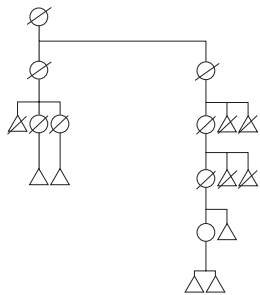


図3 パティンニャーレコーヴィラカム／コーヴィラカム

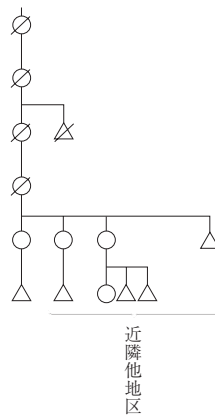


図4 カラップライツカル／コーヴィラカム

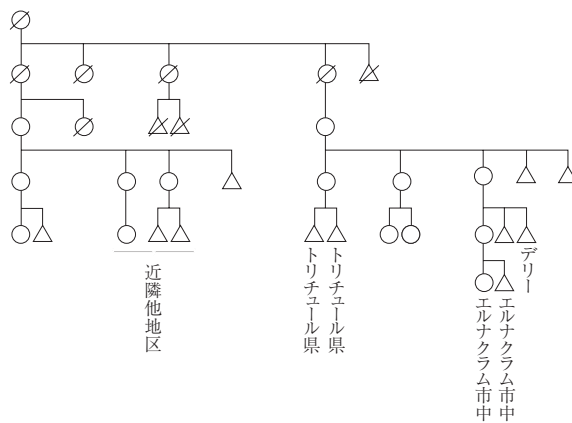


図5 ヴェッラッカーラツチラ／コーヴィラカム

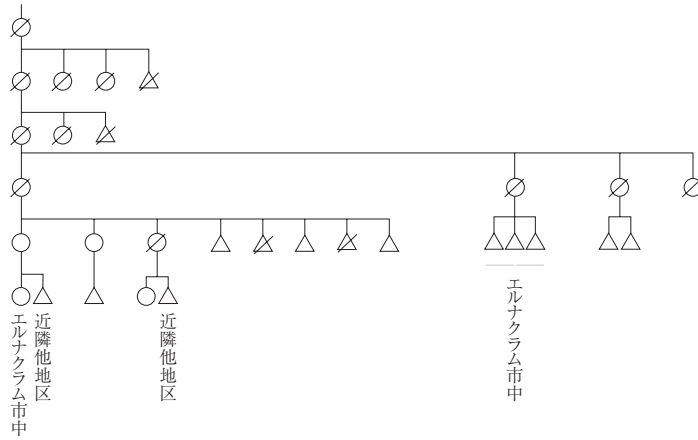


図6 アーナコッティル／アーナコッティル

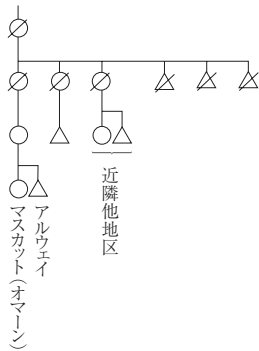


図7 タイパランビル／アーナコッティル

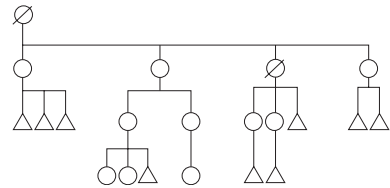


図8 ヴェーリッカカット／ヴェーリッカカット

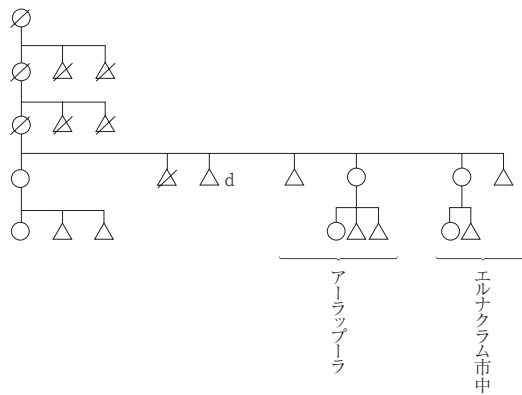


図9 ヴァタツシェリル／ヴェーリッカカット

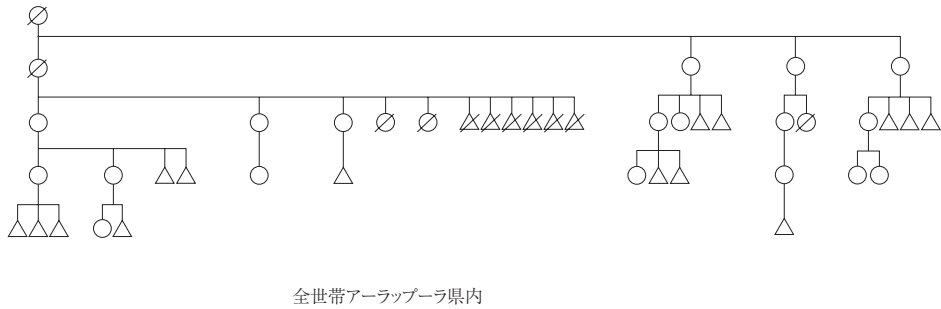


図10 プットウツパランパットウ／
プットウツパランパットウ

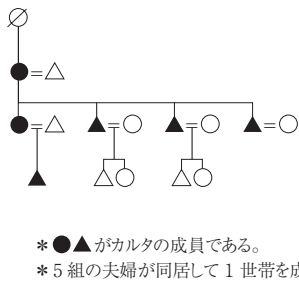


図11 コランディパッリ／
プットウツパランパットウ

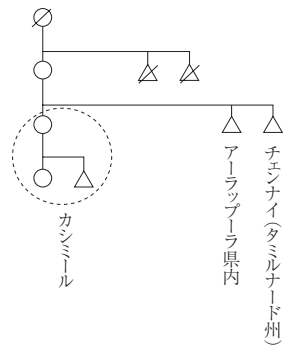


図12 チャッカーラ／プットウツパランパットウ

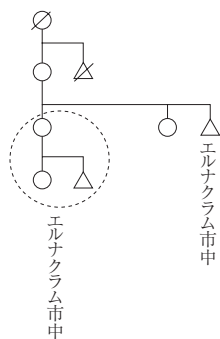


図13 クンナットウバランビル／プットウツバランバットウ

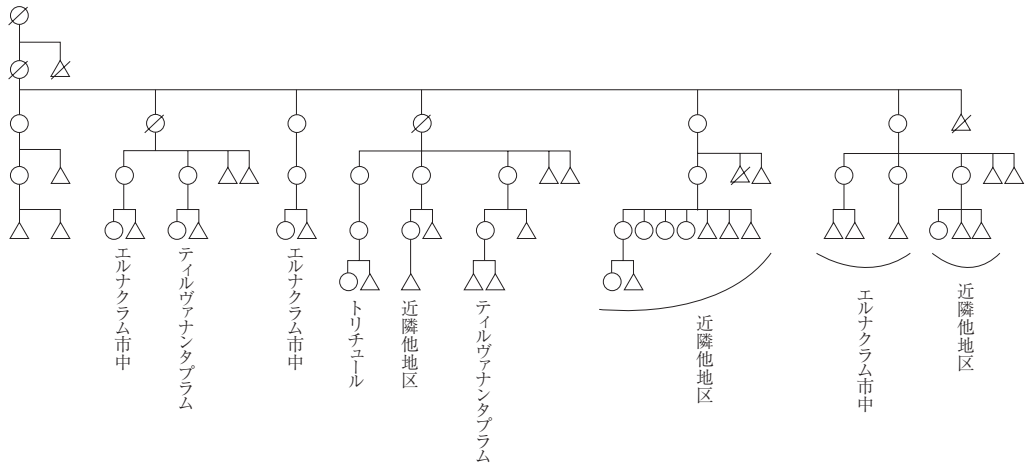


図14 プッタンヴェーリ・タラワード

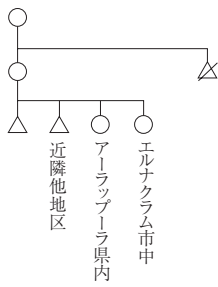


図15 パランナード・タラワード

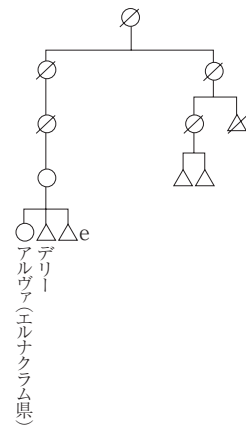


図16 パティンニャーレクトウ・タラワード

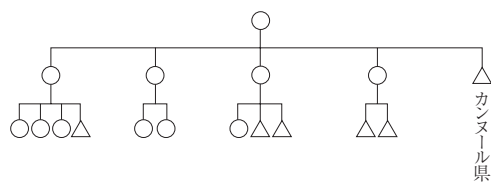




写真2 コーヴィラカムの家屋でテレビドラマの撮影が行われた時のもの（2000年8月）
タラワード

この女性については既に触れたことがあるが、彼女のアイデンティティにとって「カルタ」であることは極めて重いものがある。現在ではありえないことだが、この女主人が小学生の時、授業中に各自のジャーティを発表するように言われたという。何の迷いもなく「カルタである」と答えたところ、即座に教師から「ナーヤル」と訂正され、憤然と「絶対に違う」と言い張ったという【小林 2019：80】。1950年代末に結婚した彼女の夫は、平民的ナーヤル出身であるが、大きな企業の社員でその

近代的な才覚を彼女の父親（軍人であり、婿として彼女の母親のタラワードに同居するようになった）に認められてこの家に入り婿に入った人物である。彼の外交的な性格とともに、当時としては格段に高い給与水準にも支えられて、夫婦の関係は一貫してきわめて良好なものであったが、この伝統に反した婚姻故に、他のカルタの家からは当初相当に苛められ（家に入ることを拒否されるなど）、苦労したという。

そうした新しい時代の婚姻を受け入れた女性であったにもかかわらず、女主人は、寺院とのつながりを失えば、なによりもその威信あるナールケットゥが、どの息子が継ぐにせよ、次の代にはカルタの家屋ではなくなってしまうのであり、毎年、例大祭には、この家からもっとも価値のある奉納行列（クンバクダム）がチャンマナードゥ女神寺院に向けて出発してきたのに、それが途絶えてしまう、そのことが耐えられないのだと語っていた。彼女のこうした憂慮が、系譜の連続性ということよりも、あくまでも誇るべき家屋や寺院という場としてのタラワードとのつながりに直接に関わっていることは、前章で紹介してきたムーアのタラワード論によく合致するものと言えよう。

彼女の夫は、正式にはあくまでも妻や息子たちの後見でしかないが、チャンマナードゥ女神寺の運営に関して、裏方として様々に尽力してきており、特に法理に強いためこれまで何度かおこった裁判沙汰ではカルタ側で指導的な役割を果たし、今や他のカルタの人々からの信頼も厚く、また、妻の意をくんでカルタの家柄を残すことにも熱心であった。また、人手が足りないこともあり、女主人らカルタの女性だけでなく、息子の嫁や孫娘も奉納行列に参加させているのであるが、そのことに今やカルタの誰も目くじらを立てるようなことはない。こうしたタラワードにとっての余所者がタラワードの行事に関与することは、植民地期以前であれば考えられない事態であるが、しかし、タラワードの本質が、系譜ではなく、その財産や場とのつながりであるとするなら、このコーヴィラカムの家の実践もまた、今日の状況に合わせてサンプラダーヤムを調整することによって、正当にタラワードの存続を図っていると見ることもできよう【小林 2020：55】。調査

当時、女主人は夫と息子たちと相談しつつ、生まれたばかりの孫息子（図1のb）を彼女の姉妹の娘の娘（図1のc）と将来結婚させることで、自分たちの家をカルタへと残留させ、チャンマナードゥ女神寺院とのつながりを¹維持する計画を真面目に相談していた。

カルタの各家がこのようなことをしてまでカルタとしてのタラワードの存続を望む一方で、1990年代後半において既に合計特殊出生率1.8というケーララ社会一般に定着している少子化傾向[Drèze & Sen 2002: Table A 3]からカルタの家々も逃れられず、つまり女兒を得られない可能性も大きくなり、それだけでもマルマッカターヤムの原則に従い女神寺院に關与する資格を有するカルタの世帯数を維持することは、難しくなっていると言わざるを得ない。最初の8つのタラワードのひとつ、クルヴェリル・タラワードは既に断絶して久しいし、同じくブッタンヴェーリ・タラワードは4世帯、バランナートゥ・タラワードは3世帯、パティンニャーレクトゥ・タラワードは6世帯を残すのみである（図14～16）。しかもブッタンヴェーリとバランナートゥの場合には若い女性成員はそれぞれ2名と1名に過ぎない。アーナコッティル・タラワードに属すムッタティル・タラワードも断絶している。コーヴィラカム・タラワードの流れに属すムントゥパランブ・タラワード（図2）では、5世帯がすべてカラップラム地域に残っていたものの、もはや女性成員から女兒が生まれる可能性がない以上、近い将来にこのタラワードが断絶することは確定している。同じくコーヴィラカム・タラワードの流れに属すパティンニャーレコーヴィラカム（図3）においても、若い世代の女性は一人きりであり、同じ分節のヴェッラッカーラツチラ・タラワード（図5）やアーナコッティル・タラワードの流れをくむタイパランビル（図7）でも、わずかに3人だけとなっている。あるいはブットゥッパランパットゥ・タラワードの本家筋たるブットゥッパランパットゥ家は、既に紹介したように[小林 2020: 72]、5組の夫婦がチャンマナードゥ女神寺院のすぐ脇に位置する伝統的な家屋（エットゥケットゥ様式のタラワード）に同居する大家族であり、寺院を維持する上でコーヴィラカム同様に有形無形の重要な役割を果たしてきたが、ここでもやはり女系女兒にめぐまれず、次の世代でカルタの家でなくなる可能性が高い。最初期の5つのタラワードだけでなく、そのタラワードそれぞれを構成する大きな分節がチャンマナードゥ女神寺院の祭礼にかかる費用の分担義務（「アハッス」）の年ごとに交代する単位ともなるので、その消滅は寺を維持する上で大きな打撃となることは言うまでもない。また、若干特異な例ではあるが、ヴェーリッカカットの或る男性の家では、カラップラム地域に残りながらも、経済的に困窮し「アハッス」を果たせなくなり、次の世代をまたずにカルタのタラワードとしての紐帯を自ら放棄したと見做されている（図8のd）。

少子化に加え、さらに深刻なのは、カルタの成員の多くが既にカラップラム地域から転出してしまっており、チャンマナードゥ女神寺院のそばにいないという問題である。農業と漁業以外にこれといった産業のないカラップラムおよびその近隣の地域において、カルタの人々がその家格に見合うような職を、を見つけることはほとんど不可能であるのはもちろんのこと、ケーララ州内で最大の都市たるエルナクラムを中心としたコチにおいてさえ高学歴者の雇用の機会は、造船業におけ

¹ [小林 2020: 71] では「ムンドゥパランブ」、[小林 2020: 72] の表2では「ムートゥパランブ」とあるのは、「ムントゥパランブ」の誤りである。

るエンジニアなどを除けば、公務員や教員などに限られている。さらに言えば、所謂「ケーララ・モデル」の裏返しとして解説されるように、ケーララ州のどこでも就職難は慢性的であり、若者たちの多くが職を求めて州外へ、そして海外へと出ていかざるを得ない状況がある²。

先に示した図1～16は、カルタの各タラワードの系譜図とともに、各世帯の居住地を示しており、特に表記していないのはカラップラム地域に在住することを意味している。カラップラム地域に在住しているのは総世帯数127のうち、70世帯あまりにすぎない。これに対して同地域の平民的ナーヤルは数千世帯にのぼる。

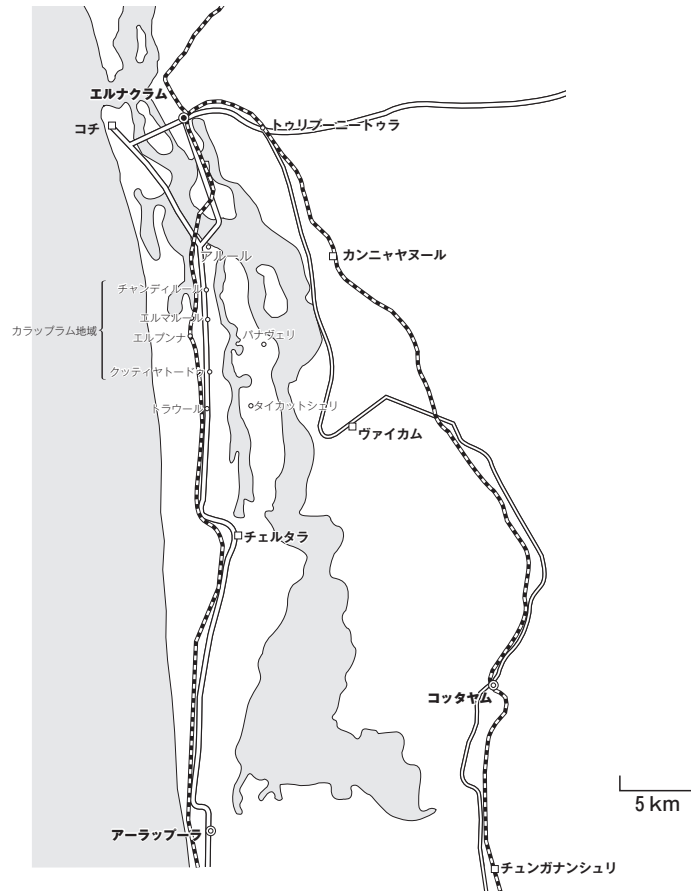


図17 カラップラム地域周辺の地図 [Arya 2007 : 7,9] から作図

²「ケーララに関する様々な社会指標、すなわち男女の人口比、識字率、幼児死亡率、出生率、平均余命などは、いわゆる先進国に近く、インドの中では特殊な数値を示していることはつとに有名である。一方、ケーララは、国民所得の観点からみれば、インドの平均値を下回っている。そこで経済成長を経ずとも、生活の質 (Quality of life) を向上させてきた例外的な事例、かつ単純な『近代化』論のアンチ・テーゼとして、開発の『ケーララ・モデル』とよばれるようになったものが、70年代以降、インド全体で経済自由化が進むとともに (1991年から本格化する)、ケーララの経済的停滞に対する批判が表面化し、『ケーララ・モデル』そのものを批判的に再検討する議論が目立ってきている」[粟屋 2004 : 23]。

「ケーララ・モデル」については、これまでに多くの研究が積み重ねられている [Drèze & Sen 2002; セン 2008]。

もちろん近隣他地区はもちろんのこと、すぐ北のエルナクラムの市中であればおよそ20キロ圏内にあり、バスやオートリキシャ、自家用車などで比較的簡単にカラップラムに来ることはできるが、そうはいってもカルタがこの地でそろって暮らしていた時代のように、皆が必ずチャンマナードゥ女神寺院を毎日参拝する（多い人は朝夕2回参拝する）習慣はとうに失われている。ましてや同じ県内でも南に50キロも離れたアーラップラ市ともなるとさらに足が遠のくのは無理もないことである。120キロも南に位置する州都テウルヴァナンタプラムや、デリー、ムンバイ、チェンナイなど遠方の大都市や、あるいは湾岸諸国などの国外にあっては、例大祭に毎年参加することさえも簡単ではない。さきほどのコーヴィラカムのa女氏の4人の息子たちのうち3人がまさにこの例に他ならない。

パランナード・タラワードのe氏（図15）のように、長く州外のいくつもの大都市でビジネスマンとして働き、定年後にUターンしてきて、チャンマナードゥ女神寺院の裏方としてほぼ毎日奉仕しているような事例もあるが、それは母の家が寺院の真裏に残されていたからであって、カラップラム地域を離れ、そこにあるべき具体的な家屋としてのタラワードを失った人々は、d氏やあのコーヴィラカムの女主人のような、「カルタ」というアイデンティティへの執着は保持しにくいようであり、遠隔地で暮らす成員のなかには分担金を支払う以外に積極的な関与をほとんど持たなくなってしまう例も少なくはない。

しかも、「マルマッカターヤム」という成員権継承の問題とは裏腹なのであるが、カルタとしての発言権があって寺院の管理者としての公的な職務を果たせるのは成人男性だけであって、そもそも成員として女性何人いるのかが数えられることさえもない。女性の社会進出が顕著なケーララ州にあっては、ことさら時代遅れな制度と言わざるを得ないのだが、変わらないこと事体が目的化しているので、変わりようがないのであろう³。また、勤め人が多くなり、寺院のいくつもある祭礼のたびに休暇をとることが難しい職場も少なくない。したがって、寺院の細々とした業務を日々こなしていくために実働部隊としてあてにできるのは、成員のなかのごく限られた人数しかいないのであって、地元に残っている特定の若い男性成員何人かの負担がなにかと大きくなり、彼らに不満が募ることとなる。カルタがチャンマナードゥ女神寺院の独占的な保有に執着しているというのは紛れもない事実だが、その主体となるべき「カルタ」そのものの空洞化が進んでいるように見えるのである。

というようなわけで、「一つのタラワードとしてのカルタ」というある種のフィクションは、チャンマナードゥ女神寺院という場の実体と結びつくことによって辛うじて保持されているが、同時に、カルタの人々は、その成員のみによってこのフィクションの裏付けたる寺院を実際に維持・管理することの困難に今や直面していると言わなければならない。

³ ケーララ州における女性の社会進出に関しては、[粟屋2004] および喜多村百合氏による一連の業績を参照 [喜多村 2000；2004；2009；2011a；2011b；2012a；2012b；2013]。

7. 各カースト単位でのコミュナル利益団体の自立

トラヴァンコール王国の末端に位置したカラップラム地域におけるカルタの支配体制が崩壊していく過程においてもっとも重要な要因となったのは、ここまで述べてきたように地域社会を包摂してきた「タラワード」という全体論的な世界観の中核的な機制が失われていったことであるが、それにともなつてこの地域社会の再編成に重要な役割を果たしてきたのが、カーストを単位とする所謂コミュナル利益団体である。共産党に関係するような一部の特別な人ないしは家族を別にすれば、ほとんどすべてのカラップラムの住民がそれぞれのカースト単位のコミュナル利益団体に属している。カルタよりも下位の社会層のそれぞれが、州全体におよぶこうした団体による組織化によって、カルタのタラワードによる包摂から自立し分離し始めた、つまり、カルタの支配体制から逃れていったと考えることができる。逆に言うなら、すでに紹介した、1970年代において平民的ナーヤルの人々がカルタの家に近づくのを恐れていたという生々しい話などからしても〔小林 2019: 80〕、このような各カースト単位での州全体におよぶ組織化がなければ、旧体制はここまで崩壊しなかったのかもしれない。後々の章で各コミュナル利益団体がそれぞれに寺院を保有しようとする傾向について言及するが、これもまた、旧体制下でチャンマナードウ女神寺院が果たしてきた「タラワード」の象徴としての役割を踏まえるならば、この包摂からの分



写真3・4 NSS Br.804の事務所



写真5・6

離、自立に関わっていることは予想に難くない。

ナーヤル・カーストにおいては、1914年にナーヤル奉仕協会（NSS）という組織が結成され、カラップラム地域にもその支部が7つ置かれている。エラマルール地区に第804支部（以下現地の慣習に従ってBr. 804のように記す）、コダントゥルットゥ地区にBr. 761、北エルプンナ地区にBr. 1458、南エルプンナ地区にはBr. 762とBr. 4375、チャンディールにBr. 5547とBr. 1411。このうちBr. 804に550世帯、Br. 1458に879世帯、Br. 761に235世帯が所属することが分かっている。この組織力を背景として、ナーカルはカラップラムの地域でカーストとしての一定の発言力を持つようになったものと考えられる。写真3、4はBr. 804のオフィスの様子である。述べてきたように、もともと「ナーヤル」という範疇の中には上昇婚が要求されるような数多くの家格を伴う下位単位が存在していたのであるが、それらを「ナーヤル」という一つの範疇に統合した立役者がこのNSSと言ってよい。この団体の活動は多岐にわたり、後々に触れることになる寺院の運営や学校の経営、最近では女性の起業を支援するマイクロ・ファイナンスなど、ナーヤル・カーストの近代化に果たした功績は小さくない。また、日常的な相互扶助をおこなうための組織でもあって、特に重要なのは、各家庭での誕生から死までに必要ないくつもの通過儀礼に対する支援である。葬式に代表されるように、それまで多くの場合にブラーフマン祭司などに当時としてはかなり高額な謝礼が必要だったために、こうした「無駄な支出」が近代化の障害になると考えられ、NSSが祭司抜きでおこなえるように、誰でも読めるような式次第や祭文のブックレットを印刷し配布するなど、様々な手はずを整えるようになったのである。

写真5と6は、エルマルールの或る新築の家でおこなわれた家開きの儀礼の様子である。インド英語ではハウスウォーミングと呼ばれ、台所の床の上で、牛乳を鍋で沸かしわごと煮こぼすというのが中心的な神事となる。吉祥を得るためにはできるだけ多くの親族や隣人、友人を招いて、儀礼後に御馳走を振る舞うものとされるのであるが、その量は半端なものではない。その材料の調達から調理、そして配膳にいたるまでの作業を全部、現地のNSS支部が請け負って手配していた。席数が限られるので、何回も客を入れ替えてサービスすることになり、待っている客が列をなすこととなる（2003年9月5日、こうした祭礼においては、伝統的な様式にのっとりバナナの葉の上に飯とともに菜食の料理が何品も盛り付けられる）。

写真7は、エルプンナの或る家の双子の新生児の命名式（2008年9月9日、生後28日目）の様子であり、式次第は占星術師（写真左）の指導の下執り行われたが、儀礼後の食事の準備はやはりすべてNSSの役員が引き受けていた。またNSSの支部会長が主賓として招待されてもいた。

こうした場面にも表れているように、NSSの組織はカラップラム地域におけるナーヤルの生活によく根付いていて、このカーストとしての社会的統合にも寄与しており、概ね国民会議派の主だった支持層を形成しているものと考えられている。

カルタたちも、他に選択肢があるわけではな



写真7

いから、エルマルールやコダントウルットウのNSS支部で一応のところ会員になってはいるが、そこは基本的に平民的ナーヤルを主体とする組織であって、本当のところ貴族的ナーヤルたるカルタが心底から帰属し得る場ではない。百年の歴史のなかで、カルタが支部の役員などに収まったことは一度としてないし、カルタが自らそうした役職を望んだこともなければ、他の人々から推されたこともないからである。支部の総会への出席も一部の若者を例外としてほとんどしていないようであるし、通過儀礼へのNSSからの支援も受けずに昔ながらのやり方でブラーフマン祭りに依頼している。カルタの或る長老によれば、NSSの支部がカラップラム地域で活動をはじめて、ナーヤルの中でリーダーシップを取るようになって以来、カルタとナーヤルとの関係は緊張をはらむものとなった、という。つまり、もともとナーヤルは領主であるカルタに従属すべき家臣であったのに、ナーヤルを代表するNSSがカルタに対等の口を利くようになったからである。カルタのタラワードを象徴するチャンマナードゥ女神寺院をNSSに譲り渡せという主張はその最たるものであると、長老たちは顔をしかめるのである。

もちろんNSSだけがカルタの地域社会における地位低下の理由ではない。トラヴァンコールの王権という後ろ盾を失ったにもかかわらず、カルタたちが旧来の大地主（ジェンミ）としての生活にしがみついている間に、ナーヤルたちの方が早々と比較的高い学歴をとって、コチなどの都市部へホワイトカラーとして勤めにでるようになった。カルタの権威を凋落させる原因として、カルタの人々自身がそのように自覚している。したがって、現在カルタの人々もよりよい教育を求める指向性は極めて強く、今はホワイトカラーが多いのであるが、逆に経済力や、学歴、職歴によって一般のナーヤルとの差異化を明瞭にすることは簡単にできるわけではなく、むしろナーヤル、それに最近では一部のイーラーワにも、追い越されないようにするのが精一杯というのが正直なところであろう。実際には、既に言及してきたような、チャンマナードゥ女神寺院の祭礼の費用負担に耐えられなくなった家まで出てきている。こうした経済資本と文化資本の平準化とNSSの組織化の進捗にともない、カルタは「ナーヤル」という範疇にますます埋もれつつあると言わざるを得ない。



写真8 NSSの巨大な本部建物（コッタヤム県チェンガナンシェリ）

ケーララにおけるカーストを単位とするコミューナル利益団体のなかで、もっとも活発であるのは、1903年に結成されたイーラワーのシュリー・ナーラーヤナ・ダルマ普及協会（Sri Narayana Dharma Paripalana Yogam、以下現地の慣習に従いSNDPと略す）である。低カーストのなかではやはりSNDPの活発な運動に後押しされたイーラワー・カーストにおける社会的地位の向上がもっとも著しいとされている。イーラワーという範疇にもともと多くの下位単位が含まれていて、それがこのSNDPによって統合されてきたことは、ナーヤルのNSSの場合とほぼ同様である。今日でもSNDPは、イーラワーのナーヤルと拮抗する人口を背景として、圧力団体としてNSS以上に選挙などで影響力をもっている。イーラワーの人々は、土地改革によって土地を手に入れたり、椰子酒などの商売を成功させるなどして経済的力をつけ、OBC（アザー・バックワード・カースト）として留保制度によって教育や就職の場でナーヤルよりも有利な立場を得てきた。インド独立以前にも、SNDPが中心となりガンディー主義者や国民会議派などと共闘して進められたのが、「寺院立ち入り運動」である。多くの犠牲を払いながらも、この運動の成果として、1936年トラヴァンコール王によって寺院立ち入りを許可する宣言が布告された。この低カーストの解放運動は、ケーララという地方の領域を超えて、インド近代史上において特筆すべき事件とされている [Rajendran 1974]。

この運動の初期の舞台となったコッタヤム県のヴァイカムという町は、バックウォーターに隔てられているとはいえ、カラップラムから東に20キロあまりほどしか離れておらず、運動の影響は直に及んだはずである。しかし、チャンマナードウ女神寺院を含むカラップラムにおける高カースト所有のヒンドゥー寺院が実際にイーラワーやブラヤに開放されたのはようやく1940年代になってからであるという。カラップラム地域には6つのSNDP支部が置かれている。チャンディールにひとつ（Br. 922＝約400世帯）、エルマルールにひとつ（Br. 671＝約700世帯）、コダンドゥルトゥに二つ（Br. 685とBr. 5018）、北エルブンナに二つ（Br. 789とBr. 923）、南エルブンナに二つ（Br. 579とBr. 529＝453世帯）である。私たちがなによりも注目しているのは、これらSNDP支部のほとんどが自前の寺院を保有しているという点である。彼らイーラワーは、高カーストの保有していた寺院への立ち入りを認めさせるだけでは満足せず、自分たちの寺院を作りたいことを欲したのである。SNDPは、この名称に刻まれているように、近代ヒンドゥー聖人の一人ナー



写真9、10 ナーラーヤナ・グルの誕生日を祝うSNDPのデモ行進

ラーヤナ・グル（1854～1928）を精神的な指導者とする組織であり、SNDPに関連した寺院ではこの聖人を神のごとく祀る儀礼（グル・プージャ）が毎日執行されている（貧しい小規模な寺で祭司がやってきて寺院が開かれるのが仮に週2回であれば、その週2回において他の儀礼と合わせて必ず執行される）。ナーヤルなど高カーストからは、ナーラーヤナ・グルその人には敬意を払いつつ、しかし、SNDPがグルを神のように祭り上げていることへの嫌悪がささやかれることが多い。

SNDPの担う相互扶助的な活動の多くは、先に紹介したNSSのそれと共通するものがほとんどであるが、NSSと比べてSNDPに特有なのは、しばしばデモ行進などによってその団結を示威する姿勢の強さである。一方のNSSの行進など私たちは一度として見たことがない。グルの着ていた袈裟の黄色が彼らのシンボル・カラーとなっている。カラップラムではたまたまそれほど過激な事態に遭遇することはなかったが、周辺では様々な風聞を耳にした。たとえば、近隣のタイカットシェリで、シリアン・カトリックの青年たちが酒に酔いふざけてナーラーヤナ・グルの彫像を祭る祠のガラスを割ってしまう事件が2000年にあった（この像はまったく同型のものをケーララの至るところで目にする）。シリアン・カトリックの側は謝罪し弁償してことを穏便に収めようと努めたが、当地のSNDP支部がイーラワールのコミュニティ全体に対する侮辱であるとして、この謝罪に納得せず、周囲の他の支部にも応援を頼んで、大規模な集会まで開き、イーラワーを虐げてきた高カーストの一部としてシリアン・カトリックを糾弾した。また、エルナクラム県トゥリプーニートゥラ市（エルナクラム市中の近郊）にあるNSSの管理する寺院プッティヤ・カーヴでは、1990年代の末に、この地区のSNDP支部によって敷地内にナーラーヤナ・グルの彫像を祭る祠を許可なく建てられてしまった。このSNDP支部は自らの寺院を持つことができず、その代替措置としてこのような暴挙にでたようである。ナーヤルたちから大いに顰蹙を買っていたものの、NSSはSNDPと表立って対立することを恐れて、公的な抗議さえしていなかった。高カーストから生き血を吸われてきたというイーラワールの被害者意識は強烈なもので、ナーヤルは後ろめたさもあってイーラワールの示威運動の前では沈黙を守らざるを得ない。また、ナーヤルたちもナーラーヤナ・グルの高名なヒンドゥー聖者としての尊厳を傷つけることは憚られるのであって、SNDPはそのような宗教的権威を政治的に利用していると陰で批判されてもいるわけである。このようなSNDPの活動によって統合されるイーラワー・カーストは、共産党にとって最大の支持層を形成しているとされている。

SNDPの指導の下で政治的な主体性を獲得したイーラワーであるが、現在のカラップラムにおけるカルタとの関係はむしろ友好的であるということができる。平民的なナーヤルとの間の緊張のようなものは、イーラワーとの間には無いし、後で述べるように、平民的なナーヤルがカルタとの対立によってチャンマナードゥ女神寺院の祭礼での伝統的な役割を放棄していったのに対して、かつて寺院への立ち入りを禁じられていたイーラワーたちは、獲得した平等の地位を誇示する意味もあって、進んで多くの奉納行列をその祭礼に向かわせるようになったのであるし、カルタの側もそれを歓迎している。またコーヴィラカムの老夫婦二人だけの家（図1のa）には、近所のイーラワーの子どもたちがしばしば大勢で遊びに来ていて、テレビを見せてもらったり、おやつをもらったりまでしていた。そうした際にこの夫婦は私に説明するのに「イーラワー」とい

う名称が子供たちに聞こえないように気を使っていたのが印象に残っている。これなどは例外的なことであるだろうが、見方によってはかつての大地主（ジェンミ）が（さらに言えばカルタ全体の本家を自認するタラワード）が、その包摂する下位者に示すべき伝統的な鷹揚さの今日的な表現の一つと言えるのかもしれない。

ただし、この「鷹揚さ」には限界があり、下位者の側からカルタが食物を受け取ることは厳格に忌避されている。パティンニャーレコーヴィラカム（図3）の成員でただ一人カラップラムに残っている青年は小学校教師をしており、或る時その彼が自分のイーラーワの教え子たちの住む近隣地区の祭礼に私を連れて行ってくれた。パットウ克蘭ガーラ地区のSNDPが運営しているナール克蘭ガラ女神寺院での大規模な祭祀であった。子供たちはもちろんのこと父母からもたいへんな歓迎を受け、祭祀後の直会にも招かれてご馳走になって帰ってきたのだが、その途中、彼が私にこう言ったのだった。「頼むから母親にあそこで食事してきたことを黙っていてくれ。激怒して僕をぶっ叩くに違いないから」。そうして彼は帰宅後すぐにシャワーを浴び、満腹だったのに母の用意していた昼食を平らげなければならなかった（私もそれに黙って付き合わされた）[小林 2003 : 265]。微妙なのは、彼の母親も息子がイーラーワの寺院に行くことはしぶしぶ認めていたのである。コーヴィラカムの家にしても、そこに招き入れられるのはイーラーワまでであって、そこにプラヤの子どもたちが加わることはまずあり得ない。

SNDPやNSSに比較すれば大きく後れを取ったが、プラヤ・カーストは1970年にケーラブラヤ大会議（Kerala Puraya Maha Sabha、現地の慣習に従いKPMSと略す）を、ディー・ワラ・カーストは1975年に全ケーララ漁民会議（Akhila Kerala Dheevara Sabha、現地の慣習に従いAKDSと略す）を組織し、カラップラム地域にもその支部を置いている。SNDPほどの影響力は持ち得ないにしても、やはりそれぞれのカーストの社会的地位の向上を目指している。AKDSはチャンディールにひとつ（Br. 15=210世帯）と北エルブンナにひとつ（Br. 14）、それぞれ支部があり、KPMSはエルマルールに三つ（Br. 318とBr. 644=約200世帯、Br. 667=287世帯）と北エルブンナにひとつ（Br. 709）

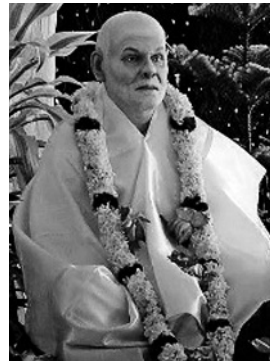


写真11 ナーラヤナ・グルの像



写真12 AKDS Br.15の事務所



写真13 KPMS Br.318の事務所

の支部をもつ。その他には、北エルブンナにクドゥンビ・カーストのクドゥンビ・セーワ・サンガム（現地の慣習に従いKSSと略す）のBr.55も存在する。

いずれにしても、ナーヤル、イーラワー、ディー・ワラ、プラヤなどが、それぞれに全ケーララ規模で組織されたカースト団体の部分（支部）となることを通じて、カルタのタラワードに包摂され支配されていた地域社会の旧体制からそれぞれ自立していった。カルタから離れて

いく平民的なナーヤルにせよ、カルタに近づいていくイーラワーにしても、NSSやSNDPによる組織化を梃子としてカルタのタラワード的なかつての支配体制からそれぞれに自立するとともに、カラップラムの地域社会を再編成してきたということにはかわりはない。こうした国民国家の内部でコミユナル利益団体のように振る舞うカーストは、謂わばエスニシティとしてのカーストと言えるだろう。本稿が特に注目したいのは、後に言及するように、こうしたエスニシティとしてのカーストがそれぞれヒンドゥー寺院を手に入れて、そこがそれぞれのコミュニティの中心に位置づけられているという現象である。これは、地域社会の再編成にとって特に大きな意味をもつものと考えられる。



写真14 KPMSのデモ行進（彼らのシンボルカラーは青）

8. 教会とミッションによる学校経営

ここまでで、カルタのタラワードによる支配が崩壊していく過程で、カースト単位のコミユナル利益団体が地域社会の再編に果たしたであろう小さからぬ役割について、後の議論を先取りして示唆してきたわけだが、もう一つ注目すべきだと考えられるのは、20世紀初頭から導入された近代的な学校教育の重要性であり、またその学校そのものの設置者が身に帯びる社会的な威信についてである。さきほども、20世紀の前半から平民的なナーヤルが優位な学歴とそこから得られる優位な就職でカルタの地位を脅かしてきたことに言及したが、今日に至るまで、宗派間、カースト間、サブ・カースト間、親族間、個人間と、あらゆる次元で激しい学歴競争が生じており、それがカラップラムのような地域での社会的な秩序にも静かに影響を与えてきた。したがって、この学校の問題はけっして単に教育の領域に限定されるのではなく、極めて政治的な領域に直結しているものと見なければならぬ。これも結論を先取りすれば、質量ともに、ケーララ州全域で言えることであるが、このカラップラム地域においても、学校教育は今現在に至るまで決定的に教会やミッションに依存している状況があって、これはかつてカルタがこの地を支配していた時代と比較して、大幅にキリスト教徒コミュニティの地域社会における存在感が増した、ということの意味している。本研究では、ヒンドゥー寺院を中心としてエスニシティ化したカーストとしてのコミユナル利益団体の形成が、キリスト教ミッションや在地のキリスト教徒たちの教会をモデルとするものであることを後に論ずることになるが、そのこととも関連して、ここではカラッ

プラムとその周辺地域における教会とその「先進性」を示す初等中等教育のための学校について一瞥しておくことにしよう。

ちなみに、カラップラム地域のムスリムは約300世帯ほどと少数派で、モスクMahalがクッティヤトッドに一箇所と、付属的な礼拝所thakyavuが他にコダントウルットゥに2箇所あるが（前者にいる上級職能者をkatheeb、後者にいる下級職能者をmaulaviと言う）、学校はひとつもっていない。

ケーララ州がインドにおいて例外的にキリスト教徒の占める割合が高い地方であることは既に紹介してきたとおりである。エルクラム県、コッタヤム県、イドゥキ県、パッタナムティッタ県などでは40%前後にまで上るのに比較すれば少ないものの、カラップラム地域の位置するアラップーラ県もまた州全域の平均を上回る20%余りをキリスト教徒が占めている〔小林2019：75〕。

ケーララ州におけるキリスト教徒の中核を占めるのがシリアン・クリスチャン（siriyankristyani）である。歴史学的には6世紀の記録が最も古く、それ以前についてはほとんど分かっていない。シリアンの神話的な起源伝承としては、使徒聖トマスの伝導によって紀元後52年に改宗したとされるナンブーディリ・ブラーフマンに出自を求める物語と、カナのトマスという名のシリヤ商人によって4世紀ないしは6世紀に連れられてきた幾つかの家族に由来するとする物語があり、それぞれが二つのサブ・グループの存在に結びついている。つまりシリアンの内部は、より古く改宗された現地人に出自をたどるとされる多数派で地位の低い「北派」（vakakkumbhagarあるいはnasarani）とシリアからの移民に出自をたどる少数派で地位の高い「南派」（thekkumbhagarあるいはkananaya）に分かれており、両者は互いに通婚しない〔Brown 1956：175〕。

シリアン・クリスチャンは、古くから王権によって保護されることによって、ナンブーディリ・ブラーフマンやナーヤルに次ぐ高い身分を与えられ、「ケガレ」などのヒンドゥー的慣習も受け入れていた。即ち、ケーララ社会においてシリアン・クリスチャンはひとつのカースト集団として認知されており、北派と南派はサブ・カーストと考えられる。ポルトガル支配期に漁民カーストなどから改宗したラテン・カトリックをシリアン・カトリックは低カーストとみなして、通婚はおろか、同じ教会堂でミサをともにするのも拒否してきた。プロテスタントに対しても、シリアンはその多くの部分を占めている不可触民出身者に同様の態度をとった〔Fuller 1976：63-65；Gladstone 1984：111-112〕。シリアンの中でこうした教会内のカースト差別を積極的に廃絶しようとしたのはマル・トーマ派教会（後述）だけである。

シリアンは、ケーララ北部のイスラーム教徒やコーチンのユダヤ人とともに、古くからマラバル海岸の香辛料交易にかかわる有力な商人として知られ、またナーヤルと同様の戦士として勇名をはせた。どちらにしてもそこにはケーララ各地の王権による保護が密接に関係していた。イギリス植民地支配下の19世紀末、自由貿易体制のもとで成功したシリアン商人は林業や胡椒・ゴムのプランテーション開発、金融やマスコミなどの産業をリードし、早くから近代的な学校教育制度も整えた。また、経済力と教会の組織力を背景として早くからケーララにおける国民会議派の中核を占め、州政界はもちろんのこと、インド中央政界に小さからぬ影響力を行使している〔Woodcock 1967：225-228；Jeffrey 1994：109-110, 114, 116, 183〕。

「シリアン」の名称が示すように、もともとポルトガルの到来まではネストリウス派の教義を信奉する唯一の教会のみが存在し、セレウキア・クテシフォン教会に従属して典礼ではシリア語が用いられていた。ところがポルトガルとともにやってきたイエズス会を中心としたミッションが、1560年にはじまる審問の手続きを通じて異端を取り締まり、その忠誠を強制的にローマへと切り替えさせた。シリアン・クリスチャンと関わる部分以外でいえば、この地におけるカトリック・ミッションの歴史的な影響は一見それほど大きなものには見えない。つまり、カトリック・ミッションが改宗することのできたのは、他には漁民カーストなど下層の一部分だけだったからである。

カトリック化されて以降のシリアン・クリスチャンの教会史は、分裂の歴史といっても過言ではない。ポルトガルの勢力が衰えた1653年、一部がヤコブ派教会(yakobaあるいはputtankuttukkar)としてローマから離反し、アンティオキア教会に従属する(現在はその関係は断絶している)。ローマの配下に残った当時の少数派で現在は多数派になっているのがシリアン・カトリック(Romo-Syrianあるいはpazhayakuttukkar)である。最近までラテン語ではなくシリア語を用い、現在はマラヤーラム語による独特の典礼をもつが、ローマ教皇の権威は認めている。19世紀に英国聖公会宣教協会(あるいは英国教会伝道協会、Church Missionary Society)によって少数のシリアンがアングリカンに改宗し、また同じミッションの影響を受けて1842年ヤコブ派教会からマル・トーマ教会が分離した。また、1909~12にかけてシリア正教会がやはりヤコブ派教会から分離するが、1958年に部分的に和解が成立している。1930年代にさらにシロ=マレンカラ教会がヤコブ派教会から分離して、カトリック陣営に移った。



写真15 Sree Narayanapuram L.P. School EzhupunnaとMannam Memorial English Medium School Ezhupunna



写真16 Govt. High School Kodamthuruth

この地区には見られないが、イギリス植民地期にはプロテスタント教会もケーララに進出しており、プラヤなど最下層の人びとを主として改宗したために、漁民層を中心とするラテン・カトリックよりもさらに下位に置かれている [小林 2001]。

このようにケーララにおけるキリスト教徒たちはシリアン・クリスチャンの中に多くの教派が分裂しており、さらにはシリアン→ラテン→プロテスタントというカースト位階上の序列があるわけだが、いずれの教派も、海外の宣教団体などの介入も含めて、学校経営にたいへんに熱心であって、それぞれの教派どうしが激しく競合しながら、ケーララ州の教育界をリードしてきた。

ちなみに、インドの学校教育制度は、旧宗主国のイギリスに倣ったものであり、Lower

Kindergarden(現地の慣習に従いL.K.G.と略す。以下同様) 1年間→Upper Kindergarden(U.K.G.) 1年間→Lower Primary School(L.P.S) 4年間→Upper Primary School(U.P.S.) 3年間→High School(H.S.) 3年間→Pre Degree 2年間→Degree 3年間→Master Degree 2年間→MPhil 1年間→Doctoral、というような積み上げ式になっている。

もちろん、カラップラム地域には、教会の設立した学校しかないというわけではない。NSS(Br. 1458)の運営するSree Narayanapuram L.P. School Ezhupunna(1st→4th)とMannam Memorial English Medium School Ezhupunnaは、生徒数は合わせて200人弱。その他に、Govt. L.P. School Eramalloor(1st→4th)は、もともと1933年にNSS(Br. 804)の創立に合わせて設立されたものの、1938年には政府に移管されたもので、現在の生徒数400人ほどである。カラップラム地域には存在しないが、SNDPが運営する学校もNSSのそれと同様に珍しくはない。

E.C.E.K. Union High School(5th→10th)は、カバーする4つの地域の名前であるEramalloor, Chandiroor, Ezhupunna, Kodanthuruthuの頭文字をとって命名されており、1950年の創立、地域住民の組合で経営されている。チャンマナードウ女神寺院はこの学校に土地を無償貸与していることからわかるように、カルタもこの学校の創設には協力した。Govt. L.P. School Eramalloorを終えた生徒をここが引き受ける役割が与えられている。Govt. High School Kodamthuruth(1st→10th+2)は1947年創立で、生徒数804人を抱えている。その他、近隣地区のトラウルにはGSBの学校T.D. School Thuravoor(1st→12th)とT. T.C.(教員養成学校)もあり、カラップラムから通学する生徒も少なくない。ゴードウ=サーラスワットゥ=ブラーミン(GSB:Gowd Saraswat Brahmin)と自称するゴアヤカルナータナカ州西岸部からケララに17世紀以降に移民してきたコンカニ語を母語とするエスニック・グループにして宗教教团的な組織が存在しており、彼らのコミュニティは各所でかなりの数の寺院とともに学校(一般的にはT.D.スクールと称せられている)も所有している。ちなみに、北エルプンナに在住するクダウンビ・カーストというのは、このGSB



写真17 T.D. School Thuravoor



写真18、19 St. Mary Immaculate Churchと
Marry Immaculate L.P. School

の召使階層としてともにケーララに移住してきた人々とされているが、今日ではGSBとは独立して一個のカーストとして存在している。

これらの公立やヒンドゥーのコミューナル利益団体の学校もそれなりに健闘しているとは言え、質量ともに、教会学校やミッション・スクールの実績に追い付けているとは言い難い。そもそも、以上の公立やカースト単位のコミューナル利益団体の学校は、教会学校やミッション・スクールを模倣してだいぶ後から作られたという経緯もある。

カラップラム地域には、5つのラテン・カトリック教会と3つのシリアン・カトリックの教会がある。ラテン・カトリックでもっとも古いのが、エラマッルールで1833年設立の聖フランシス

教会 (St. Francis Church、1000世帯以上) で、貴族的なナーヤルに分類されるカイマルの一族が自分たちを舟で輸送する漁民たちのためにここの土地を与えたと伝えられている。南エルブンナの聖アントニー教会 (St. Antony Church、約700世帯) は、1850年の創建。他は、北エルブンナで1929年設立の聖メリー純潔教会 (St. Marry Immaculate Church、570世帯)、南エルブンナで1951年設立の聖ジョセフ教会 (St. Joseph Church、300世帯)、クッティヤトッドで1955年設立のOur Lady of Fatima's Church (260世帯) である。加えてエルマッルールにあるSt. Jude Churchと呼ばれる小さな堂は1974年に聖フランシス教会の付属施設として置かれた。聖メリー純潔教会には1920年設立のL.P.スクール (生徒数200人) が付属している (教会の設立よりも早い)。

シリアン・カトリックの教会としては、エラマッルールのカルーンチェーリ教会あるいは聖ヨセフ教会と聖アントニー教会 (45世帯)、そして北エルブンナの聖ラファエル教会 (St. Raphael's Church、約300世帯) がある。聖アントニー教会は、トラウールにある親教会のランチとして1985年設立されたもので、日曜日にだけ司教がやってくる。聖アントニー教会だけがアーラップーラ教区所属で、他はすべてコチ教区の所属である。カルーンチェーリ教会は、カラボーラットゥパランプという一族を中心とした教会で、その土地は

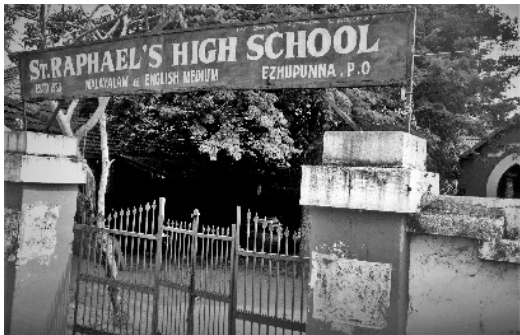
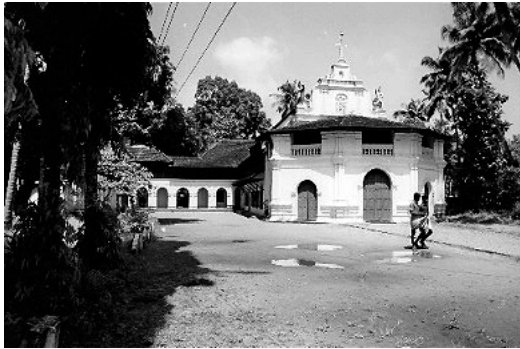


写真20、21 St. Raphael's Churchと
St. Raphael's High School



写真22 St. Augustine L.P. School Arool

チャンマナード寺院が裏手にもっていたものを提供したとのことで、1970年までその地代として5パラの米を教会は寺に納めていた。聖ラファエル教会は、巨大な水産会社（日本企業との合併）を経営しているタラガンの一族の教会である。カラボーラットウパランプ家とタラガン家は、キリスト教徒であるが、カルタに次ぐような地主層として、カルタから一定の敬意をもって応じられていたし、トッパランプ家とタラガン家の側もカルタとその所有するチャンマナードウ女神寺院の権威を尊重し祭礼時には奉納をおこなってきた。聖ラファエル・パーラーイ教会には1936年開校の聖ラファエル高校（現在はL.P. schoolからHigh schoolまでで生徒数2000人以上）が付属している。

さらにカラップラムの近隣地域にも多くのキリスト教系の学校があり、カラップラム地域とも関係が深い。ラテン・カトリックのSt. Augustine L.P. School Arool (LKG→4th)は、チャンディールールのすぐ北アルール地区にある聖アウグスチン教会（St. Augustine Church）に付属する学校である。1907年創立で、現在の生徒数1120人を数える。カラップラム地域を含む県北部における近代的な学校教育の先駆けを担った。現在カラップラムからここに通う生徒はほとんどいないが、かつては学校に通うを思えばここに通うしかなかった。また、カラップラム地域におけるその後の学校設立にこの教会学校が与えた影響は大きかったと言われている。

カラップラム地域において今日特に評価が高いのは、カトリック・ミッションによって設立運営されている学校である。アルールのOur lady of Mercy School（1st→12th、English-medium）は、1983年、イタリアの女子修道会Our lady of Mercy Congregationに



写真23、24 Our lady of Mercy School



写真25 St. Joseph Public School Pattanakkadu



写真26 Santa Cruz Public School

よって設立され（現在はインド人修道女だけで運営）、生徒数1179人にのぼる。学費は、LKG, UKG=Rs. 130 /月、1～4年=Rs. 140 /月、5～7年=Rs. 150、8～10年=Rs. 170となっており、その他初学期にRs. 500を収めなければならない。校長によれば、それほど裕福ではない家庭の子どもたちにもEnglish Mediumの教育を受けさせたいという意図で創立されたという。クッティヤトドゥの南に接するトラウールの町には、1972年、フランシスコ会系のC. C. Education Societyによって1967年に創立されたSt. Joseph Public School Pattanakadu（1st→12th）があり、やはりEnglish Mediumを採用している。生徒数約3000人を擁するというその規模の大きさに目を見張られる。さらに2001年には、コーチン司教区によりエルマルールに、St. Josephの規模には少し及ばないが、Santa Cruz Public School（Pre-Degree, 11th→12th）が新設され、進学校としての評価を高めている。

というようなわけで、21世紀に入った段階に至っても、公教育がまったく未整備であるために、以上のような教会学校やミッション・スクールにヒンドゥーも依存せざるを得ない、という状況にある。このような植民地期の教育体制から抜けきれないというのは、ケーララ州全域でも同様であって、カラップラム地域に特殊なことではない。キリスト教系の学校の優位性は、量的な意味だけでなく、質的な意味でも、明らかなようである。カルタやナーヤルの人たちが口をそろえて言うことには、公立学校もNSSの学校も、あるいはE.C.E.K. Unionなども含めて、教会学校や特にミッション・スクールに比較すると格段に質が低い印象を免れないし、教員の能力にも問題があって進学実績も明らかに劣りが見える。NSSの経営するMannam Memorial English Medium School Ezhupunnaなどは、ミッション・スクールに対抗してEnglish Mediumの提供に踏み出したのではあるが、当のナーヤルからさえ信頼を得られていないのが実情である。実際に、最近のカラップラムに残っているカルター族の子どもたちは、ほとんどすべて例外なくキリスト教系の学校に通っている。カルター族や上層のナーヤルは、E.C.E.K. やNSSの学校の教員はしていても、そこに自分の子どもを通わせることはしない、というのである。カルタでなくても、経済的に少しでも余裕のあるナーヤルやさらに一部のイーラーワの家庭では、Our lady of Mercy SchoolなどEnglish-mediumのコースに通わせることが当たり前で、そうでなければその先に高い学歴や良い職を得られないというのが常識になりつつあり、幼稚園からEnglish-mediumを選択するという家庭も少なくない。English-mediumのカリキュラムをきちんとした形で供与できるのはキリスト教系の学校であるというのが多くの人たちの一致した意見であった。グローバル化の昂進する時代にあって、アメリカの大学に留学してアメリカの一流企業に就職し、そのままアメリカ国籍を取得するのが最も成功した人生であると臆することなく多くの人が口にするような風潮のなかで、ますますキリスト教系の学校はその存在感を改めて増しているということができる。

教会学校もミッション・スクールも、王権にかわる国民国家の体制や、カースト単位のコミューナル利益団体のような直接的にカルタの旧支配体制に打撃を与えるものであったわけではないだろう。実際、ヒンドゥー至上主義者でもないかぎり、ナーヤルはもちろんのこと、カルタでさえ、一部にキリスト教教育も含まれるミッション・スクールに子弟を通わせることに、何等の痛痒も感じていない。にもかかわらず、20世紀初頭以降、どのような学校教育を受けてきたかが直接的に就職に結びつき、カーストや家格の社会的威信に密接にかかわるものとなっている以上、それ

を教会やミッションに事実上牛耳られていくという事態の歴史的な推移は、——E.C.E.K. Union High Schoolの設立に貢献したという程度の実績はほとんどなんの足しにもならない——カルタやナーヤルなど高カーストがかつて持っていた権威の基盤を否応なく掘り崩していったに違いない。キリスト教勢力は、旧支配体制から独立したという以上に、地域社会におけるリーダーシップの一部を学校の運営を通じて握ることとなったわけである。カルタを含む高カーストがそれに今や何等の痛痒も感じていないというのは、そのリーダーシップが完遂していることの証左と見るべきであろう。

引用文献

Arya, R.P. (ed.)

2007 Kerala Road Atlas & State Distance Guide, Indian Map Service.

Drèze, Jean and Amartya Sen

2002 India Development and Participation, New Delhi: Oxford University Press.

Brown, L.W.

1956 The Indian Christians of St. Thomas, Cambridge: University Press.

Fuller, C.J.

1976 Kerala christians and the caste system. Man (N. S.) 11: 53-70.

Gladstone, J.W.

1984 Protestant Christianity and People's Movements In Kerala: a Study of Christian Mass Movements In Relation to Neo-Hindu Socio-Religious Movements In Kerala, 1850-1936, Trivandrum: Seminary Publications.

Jeffrey, R.

1976 The Decline of Nair Dominance, New Delhi: Manohar.

Carolina.

Moore, M.A.

1985 "A New Look at the Nayar Taravad", Man(n.s.)20: 523-541.

Rajendran, G.

1974 The Ezhava Community and Kerala Politics, The Kerala Academy of Political Science.

Woodcock, G.

1967 Kerala: A Portrait of the Malabar Coast, London: Faber & Faber.

粟屋利江

2004 「ジェンダーの視点から見る『ケーララ・モデル』『月刊オルタ』340: 23-25。

加藤典洋

2017『増補 日本人の自画像』岩波書店。

喜多村百合

2000 「インドにおける『ジェンダーと開発』の人類学的考察——ケーララ州の女性組織運動をめぐって」『APC アジア太平洋研究』7: 36-45。

2004 『インドの発展とジェンダー』新曜社。

2008 「インド・ケーララ州における分権化政策と女性の政治・経済参加」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学紀要』4: 109-118。

2011a 「進むローカル・ガバナンスのジェンダー化——ケーララ州のパンチャーヤティ・ラージと女性の政治参加」『現代インド研究』1: 89-105。

2011b 「インド・ジェンダー化するローカル・ガバナンスの課題：ケーララ州女性議員のジェンダー意識調査

を中心に」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』22：237-248。

2012a 「インド・ケーララ州の地方自治改革とジェンダー——Women's Component Planを中心に」『筑紫女学園大学・短期大学部紀要』7：117-127。

2012b 「インドにおけるジェンダー——ケーララ州の分権化と女性クォーター制めぐって」川島典子・西尾亜希子編『アジアのなかのジェンダー——多様な現実をとらえ考える』ミネルヴァ書房、pp. 197-215。

2013 「インドのデモクラシーとジェンダー——分権化と女性の政治的エージェンシー」水島司編『変動のゆくえ (激動のインド第1巻)』日本経済評論社、pp. 95-123。

小林勝

1997 「女神祭祀と村の権力：南インドのある小さなヒンドゥー寺院をめぐる民族誌」森部一・水谷俊夫・大岩硯編『変貌する社会：文化人類学からのアプローチ』ミネルヴァ書房、202-226頁。

2000 「イデオロギーとしての母系出自集団：南インド・ケーララ地方における『タラワード』と植民地支配」森部一・水谷俊夫・吉田竹也編『文化人類学への誘い』(株)みらい、69-88頁。

2001 「家・タラワード・女神寺院：民族誌学のためのイデオロギー論入門」森部一編著『文化人類学を再考する』青弓社、pp. 19-62。

2003 「『エスニシティとしてのカースト』から『ヒンドゥーというアイデンティティ』へ——インド・ケーララ州の事例から」片山隆裕編著『民族共生への道——アジア太平洋地域のエスニシティ』九州大学出版会、243-265頁。

2019 「ヒンドゥー寺院とカーストの近代——インド・ケーララ州における地域社会の再編成をめぐる民族誌的研究 (1)」『純心人文研究』25：57-88。

2020 「ヒンドゥー寺院とカーストの近代——インド・ケーララ州における地域社会の再編成をめぐる民族誌的研究 (2)」『純心人文研究』26：51-76。

セン、アマルティア

2008 『議論好きなインド人——対話と異端の歴史が紡ぐ多文化世界』(佐藤宏・栗屋利江訳) 明石書店。

杉本良男

1991 「王宮・神祠・寺院——南アジアのヒンドゥー王権と仏教王権」松原正毅編『王権の位相』弘文堂、pp. 38-60。

田中雅一

1991a 「ヒンドゥー王権論再考——スリランカ、ムンネーシュヴァラム寺院の縁起と祭祀組織」松原正毅編『王権の位相』弘文堂、pp. 3-33。

1991b 「まつりとまつりごと——宗教と権力」米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』pp. 2514-229、世界思想社。

ホカート、A. M.

2012 『王権』橋本和也訳、岩波書店。

(2020年10月5日受理)